

#### 四 如何に過さん人の世を

物は噛みしめて見ねば、眞實の味は解らぬ。味を解らさうと思へば、是非とも噛みしめねばならぬ。食へども其の味を知らずでは、一向仕方がない。然り而して世の料理法に三種を分つことが出来る。一は甘いものを甘くして食ひ、二は不甘いものを不甘いまゝで食ひ、三は不甘いものを甘くして食ふのである。この三種の料理法が、そのまゝ我等の生活法の譬喩とすることが出来るから面白い。抑、この天地間の萬物は、我等の目前に列べられた食物の如く、我等はその食物を受くべき客の如く、自然はこの食料を提供する恩人である。而して我等の心はこの食物を調理して、身の爲めになるやうに努むべき料理人である。従つて之を甘くするのも不甘くするのも、料理人たる我等の心の技倆次第である。

折角甘しかるべき食料を不甘くして了ふ生活人は、世間敢て少くないやうに思はれる。世に太く短く面白可笑しくと云つた風の、自暴自棄な捨鉢な日暮しをする人は、即ちこれなので、其人の心實際は面白くもなく可笑しくもなく、悲しき痛き小さき短き哀れな生活である。何をしても一向手につかずたゞ蟹のやうに不平の泡を吹き、蟪蛄のやうに不満の斧をふり、額に青筋を立てなければ、鼻に水を垂れる。さてく氣の毒なることである。

屹度甘いしかるべき食料を、不甘いものとして不甘い儘で食べる生活人は前者よりも聊かましだとはいへ、たよりない仕方である。世の中は一向詰らぬものだ、思ふやうにはならぬものだ。それを詰らさうと思ふやうにしようとするのが間違、成らぬは成らぬまゝで、成らぬものとして辛抱するのさ。この人は何時も頭痛鉢巻で更に餘裕がなく、譬へば砂混りの御飯を、御飯には砂が混るべき筈のものだ位に、ガリく噛んで居るやうなものである。

甘いものを甘くたべるは勿論、不甘いものまでも甘く味をつけて、愉快に食べる生活人は、天地萬物悉く甘い。砂混りの御飯も甘しく食べると等しく、仇敵と思ふ人にまで、恩人として感謝することが出来る。彼の有名な佐藤鬼將軍が、日露戦争の際、元山から平壤へ抜ける時、部下の兵士と共に、例の砂入飯を、愉快だ好き土産話だと、味よく平げられたのも、それであります。

「藤の花水へうつればぶら上り」。ぶら下がった藤の花も、水に映して見れば、ぶら上りである。ぶら下った藤の花の人生も、ぶら上りに見せるのは趣味の力である。趣味は知って好んで楽しむに至った時、始めて湧いて来る。併し趣味の湧いて来るに至つて、眞に楽しむことが出来る。それが同時に能く好んだのであり、知つたのである。共同の生活も眞に趣味を感じるに至つて、能く之を解し、之を好み、之を圓滿に營み得る。されば趣味は人生生活の味である、味の素である。而して此の趣味は宗教の信念から来る。